

平成26年度 リハビリテーション対象患者のADL調査

<対象>

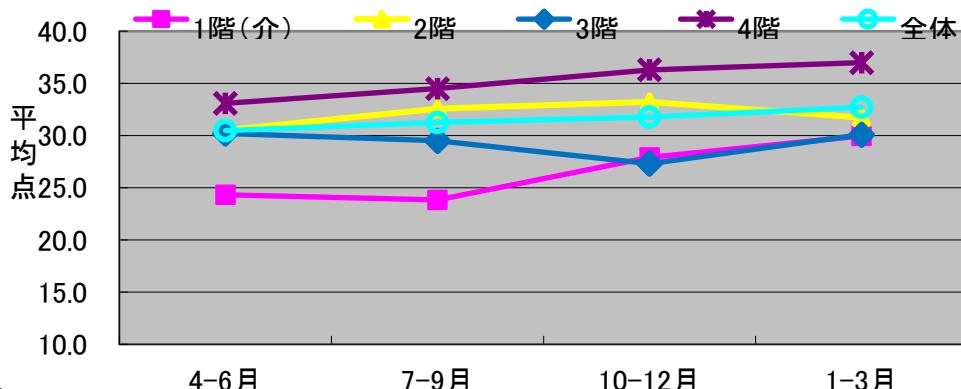
- 平成26年4月1日から平成27年3月31日の間で3ヶ月以上の入院患者
- FIM評価を実施した334例
- 年齢：82.7±9.2歳
- 性別：男性146名、女性188名

※ 除外対象：リハビリ介入に至らなかった患者

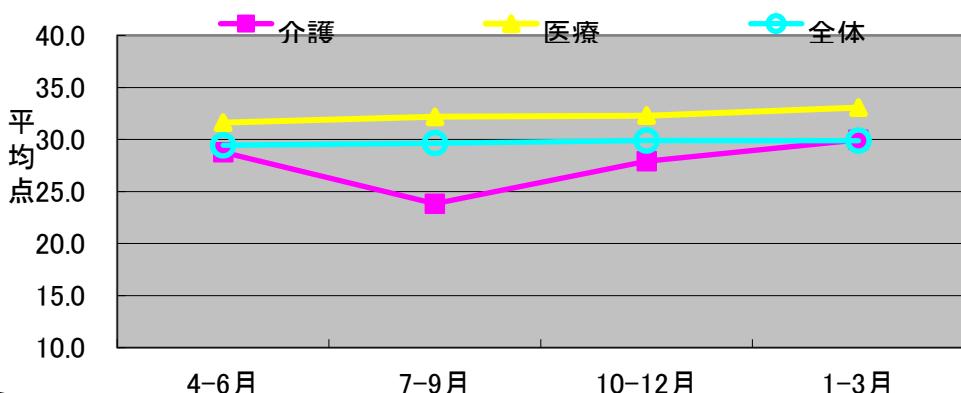
※ 7月より2階病棟(介護)が医療療養型に変換

<結果>

FIMの推移(療養・病棟別)



FIMの推移(療養・保険別)



<まとめ>

4階では在宅退院者が増えていることが数字に反映され、年間を通して増加傾向(33⇒37点)である。2~3階については波があるものの平均すると安定している。介護については、2Fが7月に医療病棟へ転換され、一時的に点数の落ち込みもみられたが、その後は安定し順調に回復している。

療養病棟全体の平均をみても右肩上がりを示しており、H26年度も療養病棟入院患者のADLは維持されていることが窺える。

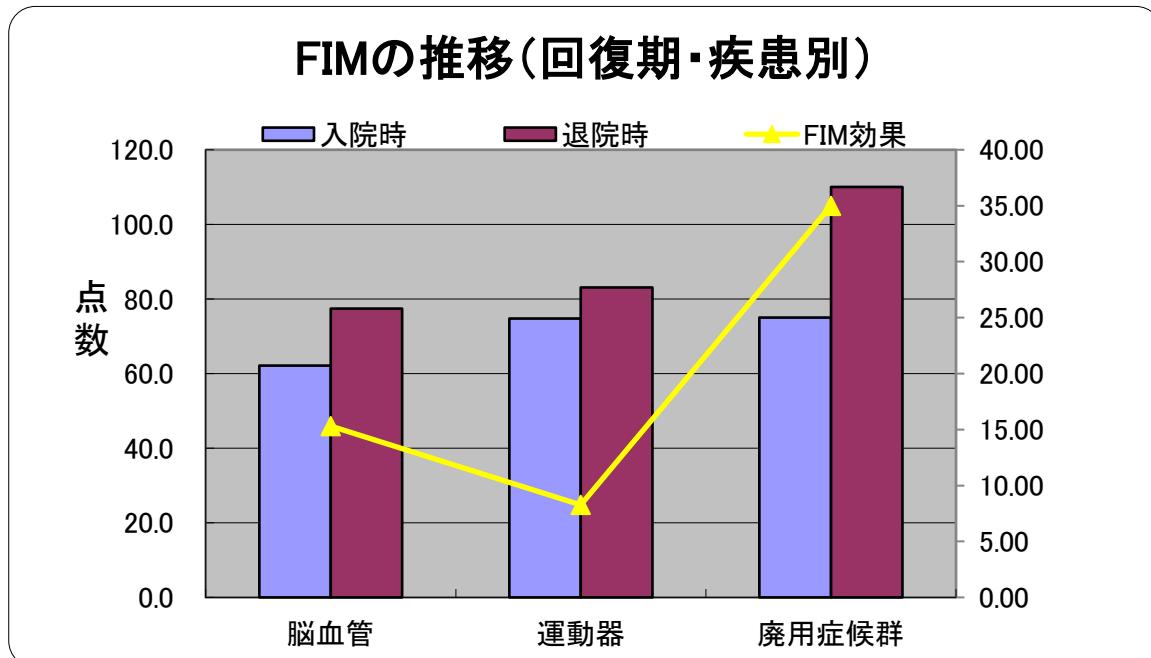
平成26年度 リハビリテーション対象患者のADL調査

<対象>

- 平成26年4月1日から平成27年3月31日の間で、入院から退院まで至った患者
- 回復期病棟の入院時と退院時でFIM評価を実施した76例
- 年齢：78.0±10.2歳
- 性別：男性37名 女性39名

※ 除外対象：リハビリ介入に至らなかった患者

<結果>



	脳血管	運動器	廃用症候群	全体
入院時	62.1	74.8	75.0	68.1
退院時	77.4	83.1	110.0	80.8
FIM効果	15.30	8.26	35.00	12.67
FIM効率	0.11	0.10	0.43	0.12
年齢	74.9	81.2	85.5	78.0
在院日数	119.2	70.1	80.5	96.2

<まとめ>

脳血管は入院時の点数が低いもののFIM効果は高く、点数の改善が運動器に比べ大きい。運動器についてはFIM効果は少ないものの退院時の点数は高値で安定している。また、廃用症候群については、H26年度の対象が2名であったため、その数字が直接反映されている。

全体的に入院時と退院時の比較では良い変化がみられているが、FIM効率については低い。そのため、在院日数の短縮が今後の課題といえる。

資料

(2014年度)

【全国平均】			
	脳血管	運動器	廃用症候群
入院時	67.5	81.0	64.0
退院時	85.2	97.7	75.8
FIM効果	17.7	16.7	11.8
年齢	72.4	78.7	79.7
在院日数	89.2	57.2	57.3